

特集

・ケント紙・木道紙
キャンペーン

・「地デジカ」騒動
(後編)

ケント紙・尾瀬の木道紙キャンペーン

日本列島が梅雨に入り暑さも厳しい折、皆様いかがお過ごしでしょうか。梅雨といえば紫陽花が思い出されますが、あの花に見える部分は実はガクで、本当の花はごく小さい、目立たないものようです。よく「土壌が酸性だと花が青紫色になる。アルカリ性だと赤紫。近年は酸性雨のせいで酸性土壌が増え、赤い花が少なくなった」と言われもしますが、あれは正しくはなく、土壌のpH値はあくまで一要素に過ぎません。また紫陽花には毒性があり、食べると中毒を起こします。過呼吸・痙攣・麻痺などの症状が出て、ひどい場合は死亡もありえます。口に入る機会はおそらく無いでしょうが、「綺麗な花には毒がある」ということでしょうか。

さてもう恒例となりました弊社の秋季キャンペーンですが、対象商品は「ケ

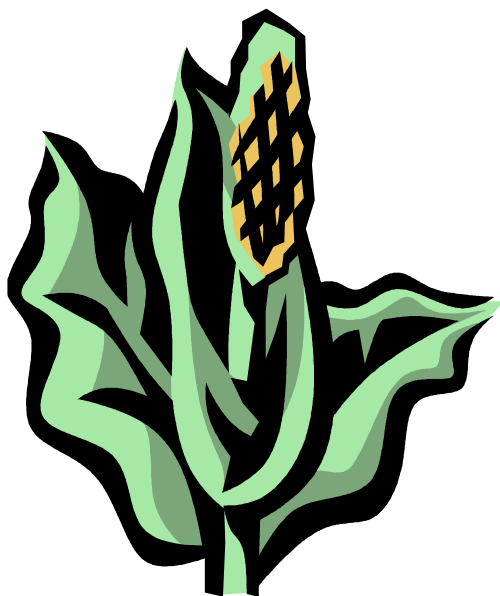
ント紙」「尾瀬の木道紙」のふたつと決まりました。

前者は言わずもがな、皆様も良くお使いになっているかと思われます。もともとリンネル(リネンの訛)・木綿くずなどを原料とした厚く白い洋紙で、製図や名刺、漫画原稿用紙などに良く使われます。弊社でも在庫しております「北雪ケント」をはじめ、さまざまな銘柄が存在する定番商品です。この機会に、今まで以上に積極的にご使用いただきたいと思います。

後者は少々説明を……。尾瀬といえば、水芭蕉や貴重な高山植物・水資源等で全国的に有名な場所ですので、行かれた方も多いかと思われます。その湿原に敷設してある木道、これを定期的に敷き直すわけですが、そこで撤去された元・木道……当然表面は

腐ってますが、それを削ると木の香りも真新しい繊維が顔を覗かせます。それを原料として含んでいるのがこの「尾瀬の木道紙」です。尾瀬に広い土地を持つ東京電力がこれを再利用しようと、中越パルプと共同で造った紙です。ラインナップは上質紙(名刺用135K)とマットコートと、多くはありませんが、これまでに様々な冊子等に使用されており、勿論東京電力の印刷物、また弊社の名刺もこの紙です。印刷物にはオリジナルロゴマークも入れられますので、対外的にもアピールできます。さらに群馬県での取り扱いには基本的に弊社だけです。オリジナルティも演出できます。

そのほか商品についての詳しい説明、見本の手配などについては、弊社営業までお問い合わせ下さい。



スギウラ株式会社
営業部 営業一課
〒370-0006
高崎市問屋町 2-2-8

電話番号
代 表
027-361-5808
営業一課
027-361-5734

Fax
027-361-1272

当社 Web サイト
www.kamisugiura.co.jp

お気付きの点や質問、
疑問などありましたら、
ご遠慮なく営業または、
下記までお問合せくだ
さい。

お問合せ
メールアドレス
sg-arai-yoshio
@kamisugiura.co.jp

「地デジカ」騒動(後編)

(前回のあらすじ)

地デジ推進の為の新キャラクター「地デジカ」の登場。その著作権者である民放連は同キャラの無断使用・二次利用は断固許さぬと強硬姿勢。それに対しネットユーザー(主に2ちゃんねらー)のとった行動とは？



アナロ熊

※ 著作
権はありません

ちょっと分かりづらいかもしれませんが、これはアスキーアート(AA)と呼ばれるもので、文字や記号のみで絵を表現するネット上の技法です。デザインとしては以前からあった人気AA「クマー」にアンテナをくっつけただけです。そしてわざわざ「著作権はありません」とまで表記したところに、このキャラの皮肉が表れています。

こうして地デジカを巡る騒動は始まったわけですが、地デジカの公式HPでの紹介文(生物としての鹿の説明)がネット辞書Wikipediaのほぼ丸写しだったことがバレて突っ込まれてみたり、ネット上では当然のように「アナロ熊」のほうが人気が出てしまっ、人気動画投稿サイト「ニコニコ動画」にテーマ曲(アニメ付)が発表されたりしました。そのほかTシャツが作られたり、TVでも紹介されたり、結局本末転倒な状況になってしまいました。

ネットに関する著作権の問題はまだ法整備が全然進んでいないこともあって、非常に曖昧なままココまで来てしま

いました。この騒動の一端はその辺にも起因するのでしょう。かつて「電車男」でも、書籍等の売上利益などは誰の懐に入るのかと騒がれたことがあります。繰り返しになりますが、その当時から法整備はほとんど進んでいません。

これからますますネットは、日々の情報収集や仕事に使われる比重が高まっていくでしょう。そんな時、こういった著作権問題が野ざらしにされているのは、折角の知的財産が無断使用・無断改変されてしまうでしょう。これは大いなる損失です。今でもTV番組や書籍、ゲームなどの違法アップ・ダウンロードは枚挙に暇がありません。Winnyなどによる情報流出も、つまるところ違法行為の副産物として生まれたものです。

表題の地デジカ騒動は、恐らくそんなには大きくならず消えていく案件だと思います。しかしこの騒動がもたらした「ネットと著作権」問題は、今まで以上に世界的に重要なテーマとなるのは間違いなく、私たちのように著作物に触れる機会が多い立場では、常日頃から気に掛けておきたいものです。

